

小堀遠州と武家の茶湯

八尾 嘉男

〔抄録〕

近世前期、茶湯でもてなしを行ない得る準備をなす必要性が全ての大名家や旗本家に行き渡った。この必要性は寛永十二（一六三五）年六月の武家諸法度改正による参勤交代制度化で更に高まった。本稿は、寛永期から慶安期における武家の茶湯に対する批判的言説を踏まえつつ、当時、大名茶人として名を馳せた小堀遠州の江戸在府時の茶会記の検討を行なうことで武家の中における茶湯について考察を試みた。

茶会記からは、大名だけでなく多くの旗本の参会を指摘でき、武家の茶湯の裾野がより大きく広がっていることがわかる。また、若年者や職務で大役を果たす前の人物が参会するなど、茶湯が武家の教養として欠かせないものになっていることも指摘できる。

更に、遠州門下形成の場として江戸が大きな役割を果たしていたこと、彼等門弟が遠州が茶会を行なう上で重要な存在であったこともうかがえる。

遠州の江戸における茶会は、武家同士の交流の場として手本とも言えるようなものを示した。これは同時期に現れた武家が茶道具に固執することへの懸念からくる茶湯への批判的な見方に対応したものと言え、自らが茶会を催すことで道具本位にならない武家の茶湯を実地に示したと言える。

キーワード 小堀遠州、江戸での茶会、茶湯の教養化、

茶湯への批判的見方、武家の茶湯

はじめに

近世前期の武家の茶湯については、徳川將軍家の茶湯と大名茶人個

人に関する研究を中心に蓄積されてきた。

徳川將軍家の茶湯いわゆる柳営茶湯は、室礼に則った御成に関する研究が一つの大きな流れとしてある。⁽¹⁾ 矢部誠一郎氏は、二代將軍秀忠

の段階で「数寄屋御成」という形式が成立したことを指摘した。⁽²⁾ 次いで、徳川義宣氏は室礼に則った御成に着目して、徳川將軍以前、室町期からの柳営茶湯の流れについて言及し、織田有楽が定めた数寄屋御成をもって近世期の柳営茶湯の一つの形を形成したと述べた。⁽³⁾ 更に、佐藤豊三氏は、数寄屋御成の定型化の時期を元和三（一六一七）年五月十三日の徳川秀忠の前田利常亭への御成以降と定めた。⁽⁴⁾

しかし、当時、全ての大名家と旗本家が招かれた將軍や大名、旗本を茶湯でもてなすのに必要な職制や道具揃えをなすきっていたであろうか。国内統一戦や朝鮮出兵という戦争と国内統治に明け暮れたといえる織豊期、関ヶ原の合戦から江戸幕府開府、徳川將軍家権力安泰を脅かす要素の排除を経て、元和偃武と言われる平和の時代が訪れた段階ではじめて、三百諸侯と呼ばれる全ての大名家や旗本家にその必要性が行き渡ったと言えよう。その必要性は、寛永十二（一六三五）年六月の武家諸法度改正による参勤交代制度化でより高まったと思われる。つまり、將軍家から個々の大名への御成以外にも幕閣との交際や大名、旗本との交際など、江戸在勤時にはその必要に迫られる場が常態化するようになる。また、参勤交代の制度化は、大名個人に限定したのではなく、藩内の重臣にも茶湯での交際を多々もたらしたと思われる。

このような状況の中、各大名や旗本にとって茶湯はどのようなものであったのだろうか。本稿では、当時大名茶人として名を馳せた小堀遠州の江戸在府時における茶会での交流関係について検討を行ない、併せて近世前期、寛永期から慶安期における武家の茶湯をめぐる言説

に触れることでこの問題に対する検討を試みたい。

小堀遠州については、研究の蓄積量は豊富と言える。その生涯や職務での功績は森蘊氏や人見彰彦氏等によって述べられており、上方の代官奉行の側面からは藤田恒春氏によって研究が行なわれている。⁽⁵⁾ として、大名茶人としての検討も熊倉功夫氏、谷端昭夫氏等によってなされている。⁽⁶⁾

遠州の史料は、当初『全集茶道』や『茶道古典全集』、『新修茶道全集』、『茶道聚錦』、遠州流茶道の流儀誌『遠州』等での伝書や一部茶会記の紹介のみであったが、⁽⁷⁾ 没後三五〇年を契機とする『小堀遠州茶会記集成』刊行による茶会記史料の充実、佐治家文書研究会による佐治家文書の翻刻紹介、現家元の書状群の紹介等によって、その存在が広く知られるようになった。⁽⁸⁾

しかし、これまでの研究は寛永文化サロンの一翼を担った人物という側面に目が向きすぎの感が否めない。交流関係の研究は佐藤サアラ氏や熊倉功夫氏によって行なわれているが、全体を通しての概観や特定の個人に対する指摘に止まったものとなった。⁽⁹⁾ そのため、江戸在府時と上方在勤時の区別無く一括りで特徴付けられ、寛永文化サロンという京都で花開いた文化サロン以外での遠州像が軽視されてきたと言える。

次節では、茶会記という史料について簡単に触れた上で、小堀遠州の茶湯での交流関係について、江戸在府時の茶会記から具体的検討を行なうこととする。

一、小堀遠州の江戸在府時における茶会での交流

本節で取り上げる茶会記とは、茶会を催した際の記録のことを指す。⁽¹⁰⁾谷晃氏によると、自らが催した茶会の記録の場合は自会記、他者の茶会に出席した際の記録は他会記と称する。近世期の茶会記には、1開催日時、2開催場所、3亭主名、4参会客名、5使用茶道具、6料理、といった事項が記される。今回、着目する4参会客は、亭主の茶会に参会した、正しく茶湯で交流を持った人物にあたる。小堀遠州の場合、後述のように多くの茶会を催しているので、その茶会の参会者を分析をすることで遠州の茶湯での交流関係とその傾向が明らかとなる。

今回、遠州の茶会を検討する史料は、小堀宗慶氏編『小堀遠州茶会記集成』⁽¹¹⁾を用いた。同書は、根津美術館平成八年度特別展「小堀遠州の茶会」の成果や野村美術館の研究紀要に堤由紀子氏によって紹介された「近江孤蓬庵小堀遠州茶会記」、藤田恒春氏の「小堀政一の居所と行動」等、当時集中的に蓄積された研究成果を参考に、小堀家所蔵本と諸写本類を網羅した遠州の自会記集成として、小堀宗慶氏・熊倉功夫氏・松澤克行氏により紹介されたものである。同書には三九二会の茶会記が所収されているが、江戸在府時以外に催されたと考えられる会には、年代推定に疑問の残るものがある。これは熊倉功夫氏が指摘している通り、出典の諸本が筆写される際に茶会での使用茶道具に一番の関心が置かれ、年代の記録が煩雑になったためと思われる。⁽¹³⁾

遠州は、慶長四（一五九九）年二月二十四日と慶長六（一六〇一）

年間十一月廿一日、元和五（一六一九）年九月六日に茶会を催している。しかし、当時はまだ茶湯の修行に励んでいた頃と思われる。それを示すかのように、記録を詳細に書き残す松屋久好にしては記載が簡略である。⁽¹⁴⁾よって、本格的に茶会を催しだすのは寛永三（一六二六）年以降と考えられ、以降、空白期間を含みつつ、没する直前まで時間を見つけては茶会を催している。

全三九二会の茶会の内、江戸在府時のものとして扱える茶会は本稿末尾（資料1）に挙げた合計一〇五会が該当する。また、三九二会の中で五〇会は年代不明なまま収録されているが、記載されている参会者から判断する限り、この五〇会は江戸以外、伏見屋敷か京都三条屋敷で催された茶会と考えられる。よって、江戸で催された茶会は、この一〇五会、全体の四分の一強と考えてよいと言える。開催は、寛永期後半以降に集中している。寛永六（一六二九）年以降、寛永十四（一六三七）年と同十八年以外は毎年江戸に参向している⁽¹⁵⁾ので、寛永十五年暮以前になぜ茶会の開催数が少ないのか、疑問が残る。この点は、後に再び触れる。開催時間は、総計数が朝八〇会、昼一会、夕一会、晩二二会、不明一会、となり、朝の開催が極端に多い。また、寛永二十年三月十三日と十二月二十三日のように、一日に複数の会をこなしている日もある。茶会の参会者は、一覧にすると本稿末尾（資料2）の通りである。合計一〇五会の茶会に二八〇人の人物が参会しているが、その二八〇人は

- ①大名及び大名の家臣（御抱えの役者や茶頭役や医師は除く）八八人
- ②旗本・御家人（但し、医師や数寄関係の役職にある者、絵師は除く）一〇二人

③ 遠州家一族や家臣、御抱えの医師、御抱えの職人 七人

④ 町人(塗師等の職人、商人、茶師、幕府や大名家の御抱えでない役者等) 一五人

⑤ 幕府や大名の御抱えの茶頭(御庭方や数寄屋頭職在職者等も含む) 一〇人

⑥ 幕府や大名の御抱えの医師や役者、碁打 七人

⑦ 寺社関係(寺社付の人物も含む) 六人

⑧ 身分不明分(身分を調べたが不明かつ推定不可能な人物) 四五人

と分類ができる(丸囲み数字は本稿末尾(資料2)の個々の人名に対応する分類欄に付与したものと対応している)。そして、この分類から次のような特徴が指摘できる。

(1) 大名と旗本の参会が多い。大名に視点が集中し、これまであまり着目されていない旗本の存在が極めて大きなものであり、武家の茶会を考える上で重要な存在であることがわかる。

(2) 大名や旗本の参会は同族同士や親類同士の組み合わせた客組みが多い。その中には、家督相続前の子弟が含まれることもあり、家督相続前に修めるべき教養として茶湯が定着しつつあることがうかがえる。家督を相続し、公務についた場合、御茶による接待の場に直面する機会がでくる。そういった機会に対する習練といった意味合いが含まれる会中にはあったと思われる。

(3) 旗本には、参会時よりかなり月日が経った頃に公務での働きが顕著になる人物がみえる。また、公務に在職中の者は、その職務の種類は多岐に渡っている。大名は当代、もしくは次代に老中職をはじめとする幕府内の要職に就任する人物が少なくない。これも(2)と同様に、茶湯の教養化を考える上で示唆的な特徴であると

思われる。

(4) (2)や(3)で若年の人物の参会を指摘したが、本稿末尾(資料2)(以下、本稿末尾と丸カッコを省いた資料2と本節内では記載する)のID 97の松平万助は、参会当時六歳という幼年での参会として特筆できる。この松平万助は、参会直後の寛永十六(一六三九)年三月に藩主として家督を相続しているので、その家督相続に伴ってのものであろうが興味深い参会である。

(5) 寛永十七(一六四〇)年までに遠州の門弟とされる加々爪甲斐守直澄(資料2 ID 8。大名。元古田織部門下)、舟越伊予守永景(資料2 ID 11。旗本。元織部門下)、北見久大夫重勝(資料2 ID 13。旗本)、前田筑前守光高(資料2 ID 36。大名、加賀国金沢藩藩主)、神尾備前守元勝(資料2 ID 51。旗本、長崎奉行職・江戸南町奉行職等を歴任)、朽木民部少輔種綱(資料2 ID 100。大名、常陸国土浦藩藩主)、神尾若狭守元珍(資料2 ID 102。旗本、神尾元勝嫡男)、⁽¹⁷⁾等が登場し、彼等が茶会を重ねて行く上で詰め衆として大きな役割を果たしたであろうことが推測できる。武家の門弟は、多賀左近常長(資料2 ID 192。旗本。元古田織部門下)と板倉周防守重宗(資料2 ID 240。大名、京都所司代職在職中)を除いて、茶会記上での記録が江戸在府時以外は激減する。これは遠州門下の展開場として江戸が大きな機能を果たしていたことの現れであり、寛永十六(一六三九)年までに元古田織部門下の再結集も含めた武家の門弟化ができていたことを示していると考えられる。

(6) (5)で指摘した門弟以外で茶会に多く参会している人物は、堀田

加賀守正盛（資料2 ID 2。大名、信濃国松本藩藩主、寛永十九年下総国佐倉藩に移封。老中職在職中）、堀式部少輔直之（資料2 ID 7。旗本、寺社奉行職在職中）、八木守直（資料2 ID 12。旗本）、榊原左衛門佐職直（資料2 ID 33。旗本）、内藤正重（資料2 ID 40。旗本）、狩野探幽（資料2 ID 55。幕府御抱え絵師）、牧野織部正成常（資料2 ID 72。旗本）、安藤右京亮重長（資料2 ID 91。大名、上野国高崎藩藩主、寺社奉行職在職中）、小出越中守尹貞（資料2 ID 103。旗本）、平野権平（資料2 ID 165。旗本）が挙げられる。彼等は門弟達と同じく江戸での遠州の茶会開催に際して重要な存在であったと言える。

(7) 村井不及（資料2 ID 1。詳細不明）、上柳彦兵衛（資料2 ID 9。町人、糸割符商人）、橘屋宗玄（資料2 ID 19。町人、糸割符商人）、永井信濃守尚政（資料2 ID 20。大名、山城国淀藩藩主）、松平下総守忠明（資料2 ID 28。大名、大和国郡山藩藩主）、石川土佐守勝政（資料2 ID 32。旗本）、武田信重（資料2 ID 99。幕府典医）、後藤顯乗（資料2 ID 117。町人、彫金師）、小野貞則（資料2 ID 152。旗本）、茶屋四郎二郎（資料2 ID 169。町人、糸割符商人）、糸屋良亭（資料2 ID 183。町人、商人）、日根野織部正吉明（資料2 ID 210。大名、豊後国府内藩藩主）等、江戸以外の場で催された茶会で重要な存在であるものの、江戸在府時に参会が極端に少なくなる人物がいる。勿論、上方に多くの多い人物ばかりであるが、そのみに理由付けを求めるのが難しい人物も含まれている。この点については更に検討が必要であろう。

(8) 寛永十七（一六四〇）年になると、初出の参会者のみで客組みが構成される会が少なくなり、寛永二十（一六四三）年以降は、更にその傾向が顕著になる。また、寛永十七年八月四日と寛永二十年十二月二十三日晩のように、複数の参会者が重複した上で、数人の入れ替えを行なった客組み構成を取ることが多い。これは場への配慮をなした上での客組みであろうし、そういった形で参会が繰り返される中で、交流関係の拡大が図られたと思われる。さて、ここまで参会者の内訳や茶会の客組みから多くの特徴が指摘でき、それらは遠州の江戸在府時の茶湯の性格を示していると考えられる。次節では、遠州が茶人として活躍した時期に現れた茶湯に対する言説を踏まえつつ、更に検討を進めてみたい。

二、武家茶湯をめぐる批判的言説と小堀遠州

寛永期以降の武家の茶湯は、寛永十二（一六三五）年六月の武家諸法度改正による参勤交代制度化も相まってより一層盛んになったと思われる。結果、岡佳子氏が指摘した茶道具を求めての奔走を招くこととなった。⁽¹⁸⁾しかし、その状況への批判的な見方も同時に現れた。まず、『本佐録』の「百姓の仕置の事」に次のような記述がある。⁽¹⁹⁾

（前略）天道の掟を守りて天下を治、又常に軍法に心をかけて英雄の心を取り、又万民を撫育し、子孫に天下を伝ふと思はゞ、日々夜々に工夫する共、心隙有べからず、然に浮世の狂言綺語に月日をうつし、我すく事に心を移し、又茶湯と言事を高上におも

ひ、歌、連歌を古びたる事とおもひ、人侍のなげきをも不知、万民餓死に及とも不聞也、天道より是を見給はゞ、天罰当座に当るべき事なれども、天の徳広きに依て、大悪人は一代にて亡、小悪人は子孫亡ぶ、盗人の類斗を悪人と云に非ず、万民を苦しむる者を大悪人と云也、孟子曰、暴其民甚則身弑国亡、不甚則身危国削、名之曰幽厲と有、天地の間に人ほどの宝はなし、又金銀は水火に入てもおぼれず、人につぎての宝也、しかれども道に背たる金銀を蓄好時は、人を損るに依て、君子は財を集めず、然に近代は、君の一命に替り、大事におよびて二心あるまじきとおもふ侍をば、あだ敵のごとくつかひなし、百姓は妻子をはなれてかつえに臨むごとくにせたげ、金銀をばつちくれのごとくにして、茶人反古の切れなどを宝とす、国の政の為にさはりと成者也、天道の理あらば、茶湯の師匠する者子孫必亡べし、天下の主人の数寄は、日本の国土山川をよく作事して数寄屋と定め、其中の万人を客と請じ、其人の心に合様に亭主ぶりを致したらば、天下第一の数寄者たるべし、（略）

『本佐録』は、幕府重臣の本多正信に仮託をした者の作とされ、著者に関しては諸説が存在している。史料的には、著者が不確定という点は気になるものの、写本として多く伝わり、当時の教訓書として役割を果たしていたことは事実であり、その内容の与えた影響は少なからずあったものと考えられる。更に、『藩鑑』には、尾張の徳川義直や紀伊の徳川頼宣等、当時の状況を目の当たりにした大名による武家の茶湯のあり方を述べた逸話が残されている。⁽²⁰⁾これらは武家階級一般

に対して出された戒めととれ、武家が茶道具に固執することへの懸念が示されたとも言えよう。

遠州はこういった批判的見方が現れる同時代に自らの茶湯を展開している。この批判的見方を踏まえて茶会記を見ると、茶器の氾濫を助長する商人や職人の参会の少ない、武家同士の交流の場として茶会を展開し、批判的な見方に対応したものと言える。当時、江戸に武家同士の茶湯の場が形成されたことは、大きな反響を与えたと考えられる。参会した人物は、武家の茶湯のあるべき姿として茶会の場合から多くを学び、参会者同士で更に交流を深めたはずである。遠州は茶会を催して交流の場を設けることで、道具本位にならない武家の茶湯を実地に示したのでないだろうか。家督相続前の者や公務で大役を果たす前の者等の若年の人物を招いているのもその現れであると考えられる。手本としての茶会興行を重ねる場合、遠州の意図を理解し、茶会の場で支えとなる人物が必要になる。その支えの役割を門弟達や複数回招かれた大名・旗本が果たしたのであろう。

茶会開催年次の偏りも、寛永十二（一六三五）年以降茶湯が盛んになる中、道具本位に茶湯を嗜む武家が現れるという状況が大きく影響している可能性はあると考える。

おわりに

近世前期、茶湯でのもてなしを行ない得る準備をなす必要性が全ての大名や旗本家に行き渡った。この必要性は寛永十二（一六三五）

年六月の武家諸法度改正による参勤交代制度化で更に高まった。本稿は、寛永期から慶安期における武家の茶湯に対する批判的言説を踏まえつつ、当時大名茶人として名を馳せた小堀遠州の江戸在府時の茶会記の検討を行なうことで武家の中における茶湯について考察を試みた。

遠州の茶会記からは、大名だけに限らず、多くの旗本の参会を指摘でき、武家の茶湯の裾野がより大きなものに広がっていることがわかる。また、若年者や職務において大役を果たす前の人物が参会するなど、茶湯が武家の教養として欠かせないものになっていることも指摘できる。更に、茶会記から見ると、遠州門下形成の場として江戸が大きな役割を果たしていたこと、彼等門弟が遠州が茶会を行なう上で重要な存在であったことも推測できる。

遠州の江戸における茶会は、武家同士の交流の場として手本とも言えるようなものを示した。これは遠州が自らの茶湯を展開した頃に現れた武家が茶道具に固執することへの懸念からくる茶湯への批判的な見方に対応したものと言え、自らが茶会を催して交流の場を設けることで、道具本位にならない武家の茶湯を実地に示したと言える。

以上のことが本稿の分析から示すことができた。最後に今後の課題を挙げることで本稿の終わりとしたい。本稿で取り上げた小堀遠州の次代に大名茶人として重きをなした片桐石州も多数の茶会記が残されている。⁽²¹⁾石州の茶会記からうかがえる交流関係を検討することで武家による茶湯を媒介にした交流の場の変遷を追っていきける。まず、この検討が課題としてある。次に、本稿では小堀遠州と柳営との関わりに

については触れなかった。⁽²²⁾柳営茶湯は、片桐石州と共に検討すべきものと考えており、これも今後の課題としたい。また、遠州は本稿で取り上げた茶会記以外にも膨大な書状類がある。書状類からの検討を重ね合わせることも当然必要なものと考えており、併せて今後の課題としたい。

〔注〕

〔1〕柳営茶湯という言葉に含まれる「柳営」とは、「將軍家」という「家」の色彩の強い言葉である。近世期における柳営茶湯とは、徳川將軍家の茶湯を意味する。柳営という言葉が当時どのような形で認識されていたかは、『日本国語大辞典』第十卷（日本国語大辞典刊行会編、一九八一年、小学館）によると、『東京教育大本下学集』や『林羅山文集』三九「源尊氏」の項を例示した上で、「柳営」という語の二つ目に

將軍、將軍家

と記されている。

〔2〕矢部誠一郎「徳川秀忠と数寄屋御成」〔茶湯—研究と資料—〕第三号所収、一九七〇年、木芽文庫、後『日本茶の湯文化史の新研究』所収、二〇〇五年、雄山閣

また、矢部氏は「近世大名の茶の湯の展開—佐竹義宣と細川忠興—」〔谷端昭夫編・千宗室監修『茶道学大系』第二巻茶道の歴史所収、一九九六年、淡交社、後前掲矢部誠一郎『日本茶の湯文化史の新研究』所収〕の中で、將軍からの賜茶という視点でも考察を行っている。

〔3〕徳川義宣「柳営茶の湯」〔茶道聚錦〕四織部・遠州・宗旦所収、一九八三年、小学館

- (4) 佐藤豊三「將軍家『御成』について(五)」『金鯢叢書』六所収、一八八四年、徳川美術館

- (5) 森繻『小堀遠州』(一九六七年、吉川弘文館)

人見彰彦『備中国奉行小堀遠州』(一九八六年、山陽新聞社)

太田浩司『テクノクラート 小堀遠州—近江が生んだ才能』(二〇〇二年、サンライズ出版)

藤田恒春「慶長七年近江国検地を廻って」『ヒストリア』一二九号所収、一九九〇年

「近世上方支配の構造」(『日本史研究』三七九号所収、一九九四年)

「小堀政一の居所と行動」(藤井謙治編『近世前期政治的主要人物の居所と行動』京都大学人文科学研究所調査報告第三七号所収、一九九四年)

- (6) 熊倉功夫「大名茶の成立」(『茶湯—研究と資料—』第一号所収、一九六九年、木芽文庫、後「寛永文化の研究」所収、一九八八年、吉川弘文館)

「小堀遠州の茶友たち」(一九八七年、大統書房)

「逸話のなかの小堀遠州」(熊倉功夫編『茶人と茶の湯の研究』所収、二〇〇三年、思文閣出版)

谷端昭夫『近世茶道史』「第一章近世的茶道の創造」「第二節大名茶道の創造」(一九八八年、淡交社)

岩井茂樹「小堀遠州と『きれいなさび』—美的概念用語の成立過程—」(『茶の湯文化学』一一号所収、二〇〇五年、茶の湯文化学会)

- (7) 伝書は、『小堀遠州書捨文』(『新修茶道全集』巻九文献篇下所収、一九五六年、春秋社)が代表的なものとして挙げられる。

茶会記は、寛永二(一六二五)年八月二十六日から九月二十三日までの

二十四会の遠州自会記の写しとされる『寛永初之日記 小堀遠州茶之湯置合之留』(『全集茶道』巻の十一茶人篇(三)所収、一九三六年、創元社)と寛永九(一六三二)年十二月十一日から翌寛永十年四月二十六日までの十七会の遠州自会記の写しとされる『寛永九年遠江茶之湯道具置合之留』(前掲『全集茶道』巻の十一茶人篇(三)所収、正保二(一六四五)年十月十一日から正保三年八月二十一日までの遠州自会記を翻刻紹介した小堀宗慶・田中博美『遠州口切帳』(前掲『茶道聚錦』四織部・遠州・宗旦所収)、東大寺鎮守八幡宮若宮神人として奈良轉害郷で漆屋を業とした松屋久政・久好・久重三代の他会記『松屋会記』(『茶道古典全集』第九巻所収、永島福太郎翻刻紹介、一九五六年、淡交社)の内、松屋久重の他会記が挙げられる。遠州流茶道の流儀誌『遠州』では本稿と関わる部分で言えば、昭和五十八(一九八三)年七月号から平成五(一九九三)年二月号まで一一一回にわたって、小堀宗慶氏を中心に対談形式でなされた「遠州の交友と茶会記」での個々の茶会の分析と紹介が挙げられる。

- (8) 小堀宗慶編『小堀遠州茶会記集成』(一九九七年、主婦の友社)
佐治家文書研究会編『佐治重賢氏所蔵小堀政一関係文書』(一九九六年、思文閣出版)

小堀宗慶編『小堀遠州の書状』(二〇〇二年、東京堂出版)
『続小堀遠州の書状』(二〇〇六年、東京堂出版)

- (9) 佐藤サアラ「遠州茶会に招かれた人々」(平成八年度根津美術館特別展 図録『小堀遠州の茶会』所収、一九九六年、根津美術館)
前掲(注6) 熊倉功夫『小堀遠州の茶友たち』

「逸話のなかの小堀遠州」

- (10) 谷見「茶会記論の試み」(『藝能史研究』一四二号所収、藝能史研究会、一九九八年、後『茶会記の研究』所収、二〇〇一年、淡交社)

(11) 前掲注(8) 小堀宗慶編『小堀遠州茶会記集成』

(12) 堤由紀子翻刻紹介「近江孤蓬庵小堀遠州茶会記」(『野村美術館紀要』第

三号所収、一九九四年)

根津美術館平成八年度特別展「小堀遠州の茶会」

五島美術館平成八年度特別展「小堀遠州の観た茶人」——中興名物茶入

を中心として」

前掲注(5) 藤田恒春「小堀政一の居所と行動」

他には、市立長浜城歴史博物館平成九年度特別展「小堀遠州とその周辺——寛永文化を演出したテクノクラート」が挙げられる。

(13) 熊倉功夫「小堀遠州の茶会記」(前掲注(8) 小堀宗慶編『小堀遠州茶会記集成』所収)

(14) 前掲注(7)『松屋会記』参照。

(15) 前掲注(8) 小堀宗慶編『小堀遠州茶会記集成』では寛永二(一六二五)

年と寛永三年の両方の可能性を含めたまま紹介しているが(前掲注(13) 熊倉功夫「小堀遠州の茶会記」、同本会数番号3から26、八月二十六日朝から九月二十三日朝までの二十四会は参合している大名や旗本の顔触れから判断する限り、寛永三年の徳川家光上洛に伴うものとしか考えられない。熊倉氏は寛永三年と判断した場合、スケジュールの過密さと後水尾天皇の二条城行幸前日に朝・昼・晩の三会も茶会を行なえたかという点に疑問を示しているが、逆に家光上洛と行幸という特殊事情に起因して、過密な場が設けられたと考える方が自然であろう。この二十四会を寛永三年と判断した場合、寛永二年は二・三会しか茶会を行なっていないことになるため、本稿では本格的に茶会を催しだした時期を寛永三年と判断した。

(16) 前掲注(5) 藤田恒春「小堀政一の居所と行動」参照。

(17) 門弟の把握は、天保八(一八三七)年尾張藩南阪富永頼編『茶人大系図』

と林屋辰三郎他七名編『角川茶道大事典』(一九九〇年、角川書店)を主に参照した。

(18) 岡佳子「もうひとつの寛永文化論——武家と道具の関係——」(『京都市歴史資料館紀要』第一〇号・開館一〇周年記念論集所収、一九九二年、京都市歴史資料館)

(19) 『日本経済叢書』巻一(一九一五年、日本経済叢書刊行會)二〇頁から二一頁より抜粋引用。なお、『本佐録』の作者を本多正信に仮託した者の作とした説は、朝尾直弘・宇野俊一・田中琢編『角川新版日本史辞典』(一九九七年、角川書店)「本佐録」項に拠った。

(20) 徳川義直は、『藩鑑』巻三「尾張殿」権大納言源義直卿に、

一 御賞訓示 是ハ御子孫への御いましめにとて、敬公ミつから作り

給ひて瑞然公へ進せられしとぞ、

(中略)

一 芸能の事しられハ野人に同し、然る時ハ少しハしりたるもよし、然れとも其道ハ面白きにより実なる事をハ次にするものなり、其心をもて能嗜むへき事なり

一 若き時ハ物をもてあそふに心あるへき事なり、多分の人すきの道具色々のものすきなる物を見てハほしく、又ハこしらへたきものなり、先武士の道具を拵ゆるハしかり、其外にハ好さるものなり、是若き時のたしなミなり(後略、出典は『稽徳編』)

と述べたとされる史料があり(『内閣文庫所蔵史籍叢刊』特刊第三藩鑑第一巻、一九八六年、汲古書院、一〇五頁から一〇六頁より抜粋引用)、徳川頼宣についても『藩鑑』巻九「紀伊殿」権大納言源頼宣卿に

一 三百石に候士か代金三両にて掛物を買けるを御聞成され、無用の費致し候と穿鑿になり御目付を以御聞候に必定なりと書上る、重て人馬・兵具・武具の嗜ハ有候やと御尋、吟味の上馬も常より能

馬、物具・下人丈夫に持、武道の心掛さへ有ハ、其上ハ掛物・茶湯慰も悪からぬ事、又他の客も来る床に何も懸す、たとへ懸るとても三社の託宣も懸られぬ物なり、家中の外聞なれハ墨跡絵賛の物も求たるとて苦しからず、さりながら過ぬ様にとの御意なり

同上 (『紀州頼宣卿言行録』、『南龍君遺筆』)

という記載が見出せる (前掲『内閣文庫所蔵史籍叢刊』特刊第三藩鑑第一巻、一九五頁より抜粋引用)。

南和男氏の解題によると、『藩鑑』は徳川氏創業の当初から八代吉宗の治世、寛保(一七四一―一七四四)年間まで(一部は明和末、一七七〇年代初め頃まで)を対象時期として、諸大名の嘉言善行や武勲の事蹟などを幕命により諸書から採録して編纂したものであり、嘉永六(一八五三)年に完成している。個々の箇条には採録に際しての典拠を明示している。本稿では、その典拠は、それぞれの史料末に丸カッコ内に『を附した上で引用した。また、引用に際しての句点の補足も併せて行なった。

(21) 拙稿「片桐石州自会記」(『茶の湯文化学』九号所収、二〇〇四年、茶の湯文化学会)

(22) 茶会記からは、柳営御抱えの茶頭役の者が複数人参会していることがわかる(本稿末尾(資料2)分類項に⑤を付与した者)。彼等が遠州から教授を受けたという事実は、管見の範囲では見出せない。

〔付記〕

・本稿は、佛教大学大学院に提出した修士論文の一章に大幅に加筆修正を加えたものである。執筆に際しては、卒業論文以来御指導を賜っている竹下喜久男先生をはじめ、渡邊忠司先生、谷端昭夫先生に

多くの御助言を頂いた。また、財団法人今日庵今日庵文庫の横田八重美氏、山田哲也氏には文献調査で大変御世話になった。記して深謝申し上げます。

・本稿執筆に際して、千利休プロジェクト第十一回ミーティングにおいて口頭発表を行なった。当日貴重な御意見を下さった方々に深謝申し上げます。

(やお よしお 文学研究科日本史学専攻博士後期課程単位取得満期退学)

(指導…渡邊 忠司 教授)

二〇〇六年十月十九日受理

(資料1) 小堀遠州の江戸在府時における自会記

ID	年代	西暦	月	日	時間	参 会 客 名	底 本	備 考
1	寛永08	1631	9	21	夕	村井不及、	『小堀家所蔵茶会記E本』	
2			10	2	朝	記載なし、	『小堀家所蔵茶会記E本』	
3			10	27	朝	記載なし、	『小堀家所蔵茶会記E本』	
4	寛永13	1636	5	21	不明	『大有宗甫居士茶具置合』	『小堀家所蔵茶会記E本』	徳川家光の日光墓参道中の品川茶屋御成に際して道具を置き合わせた際の記録。
5	寛永15	1638	12	29	朝	堀田加賀守殿、嶋四郎左衛門殿、岡宗員、	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』	
6			12	30	朝	松平右衛門大夫殿、加々爪式部殿、堀式部殿、加々爪甲斐守殿、上柳彦兵衛、	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』	
7	寛永16	1639	1	1	晩	佐久間将監殿、舟越三郎四郎殿、八木勘四郎殿、北見久太夫殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「八木勘四郎殿」を「八木勘十郎殿」、「北見久太夫殿」を「北見久太夫殿」と記載。
8			1	3	晩	池田内蔵助殿、小堀左馬助殿、西尾権之助殿、小堀大膳殿、同九郎兵衛殿、橘屋宗玄殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
9			1	4	晩	永井信濃殿、嶋田運也、山田宗縁、茶屋長右衛門、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「嶋田運也」を「嶋田蓬也」と記載。
10			1	5	朝	柳生但馬殿、同十兵衛殿、加藤勘助殿、長谷川等書、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「長谷川等書」を「長谷川等中」と記載。
11			1	7	晩	松平下総守殿、秋元但馬殿、上柳久弥、(山田久弥、)	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「上柳久弥」を「上柳彦兵衛」と記載。「山田久弥」は『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』から補足。
12			1	9	朝	曾我丹波殿、石川土佐殿、榊原左衛門佐殿、妙道、御茶堂正斎、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「榊原左衛門佐」を「榊原左衛門佐」と記載。
13			1	12	晩	松平筑前殿、松平飛騨殿、中根大隅殿、高木筑後殿、内藤内記殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「内藤内記」を「内藤外記」と記載。
14			1	13	朝	菅沼織部殿、酒井いなハ殿、菅沼右近殿、田中主殿殿、本多美作殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「酒井いなハ」を「酒井因幡」と記載。
15			1	16	朝	渡辺一学殿、蔭山土佐殿、小笠原久兵衛殿、いしや了庵、小堀右近殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
16			1	20	晩	神尾備前殿、小倉忠左衛門殿、後藤庄三郎殿、小堀三郎兵衛殿、狩野探幽法眼、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「狩野探幽法眼」を「狩野探幽斎法眼」と記載。
17			1	21	朝	松平伊豆殿、同左門殿、同甲斐殿、同三記殿、同右京殿、久志本式部殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
18			1	23	朝	加藤式部殿、松平伊賀殿、石川八左衛門殿、升屋道勾、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「升屋道勾」を「岡や道勾」と記載。
19			1	26	朝	斎藤伊豆殿、同摂津殿、内藤庄兵衛殿、稲葉権之佐殿、堀三左衛門殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「堀三左衛門」を「堀三右衛門」と記載。
20			1	29	朝	牧野内匠殿、同織部殿、花房志摩殿、杉浦蔵之亮殿、吉良若狭守殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「杉浦蔵之亮」を「杉浦蔵之丞」、「吉良若狭守」を「吉良若狭」と記載。
21			1	30	朝	大橋龍慶、玄悦法印殿、小幡孫兵衛殿、大川原源五左衛門殿、御茶堂宗伝、神谷式部、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「玄悦法印」を「玄治法印」、「小幡孫兵衛」を「小幡源兵衛」、「神谷式部」を「神主式部」と記載。
22			2	3	朝	太田備中殿、板倉阿波殿、同主水殿、石見十蔵殿、津田平左衛門殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「同(板倉)主水」を「同(板倉)主水正」、「石見十蔵」を「石見十蔵」、「津田平左衛門」を「浜田平左衛門」と記載。
23			2	4	朝	吉良上野殿、井上河内殿、水野見物殿、松平出雲殿、安藤右京殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
24			2	5	朝	酒井備後殿、同老岐殿、同民部正殿、同藏人殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
25			2	7	朝	松平越前殿、同万助殿、織田左衛門佐殿、道安、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
26			2	8	朝	朽木民部殿、水野右京殿、神尾主水殿、小出越中殿、大久保久内殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「大久保久内」を「大久保宮内」と記載。
27			2	10	朝	立花立斎殿、永井左近殿、本田下総殿、松平能登殿、永井大和殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「本田下総」を「本多下総」と記載。
28			2	12	朝	小浜民部殿、堀越中殿、小浜久太郎殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
29			2	13	朝	酒井宮内殿、同摂津守殿、同長門守殿、松平主膳殿、後藤頭乗殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
30			2	14	朝	石川彈正殿、同権十郎殿、森川金右衛門殿、上野八郎左衛門殿、太鼓打左吉、	『小堀家所蔵茶会記C本』	

ID	年代	西暦	月	日	時間	参 会 客 名	底 本	備 考
31			2	15	朝	小出大和殿、同大隅殿、同木工殿、戸川土佐殿、能勢小十郎殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「同木工」を「同左」と記載。
32			2	16	朝	伊丹蔵人殿、櫛半十郎殿、木原木工殿、藤重等言、宗門、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「木原木工」を「木原左」と記載。
33			2	19	朝	阿部四郎五郎殿、島等甫、朽木出雲殿、物ノミ宗春、御茶當了雲、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
34			2	21	朝	渡辺図書殿、大沢左京殿、馬場三郎左衛門殿、青山善四郎殿、花房勘右衛門殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「大沢左京」を「大沢右京」と記載。
35			2	25	朝	上村出羽守殿、本多豊前殿、中山勘解由殿、御茶道春貞、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
36			3	2	朝	毛利甲斐殿、向井将監殿、松平因幡殿、本阿弥光伯、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「本阿弥光伯」を「本阿弥光由」と記載。
37			3	2	晩	観音寺、小野宗左衛門殿、本住坊、小野長左衛門殿、平野藤四郎殿、小野喜左衛門殿、大津 篠井弥三郎殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「小野喜左衛門」を「小野喜右衛門」、「大津 篠井弥三郎」を「大津ノ 篠井源三郎」と記載。
38			3	5	朝	市橋下総守殿、同兵吉殿、同三四郎殿、岡田将監殿、具兵部殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
39	寛永17	1640	5	22	朝	堀田加賀殿、北見久大夫殿、小野小左衛門殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「5月26日」で記載。
40			5	27	朝	浅野因幡殿、平野権平殿、加々爪民部殿、同甲斐殿、上柳彦兵衛、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
41			5	28	朝	佐久間将監殿、牧野織部殿、舟越三郎四郎殿、八木勘十郎殿、狩野法眼、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「狩野法眼」を「牧野法眼」と記載。
42			5	29	朝	渡辺一学殿、菅沼宮内殿、小堀左近殿、茶や四郎次郎、同新四郎、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「茶や四郎次郎」を「茶や四郎二郎」と記載。
43			6	1	朝	稲葉美濃殿、堀式部殿、北見五郎左衛門殿、榊原左衛門佐殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
44			6	5	朝	堀三左衛門殿、池田内蔵助殿、小堀九郎兵衛殿、後藤利兵衛、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「後藤利兵衛」を「後藤理兵衛」と記載。
45			6	6	朝	朽木民部殿、久世大和殿、山口出雲殿、京極左近殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
46			6	10	朝	松平下総殿、石川主殿殿、大久保主膳殿、同右京殿、堀式部殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
47			7	2	朝	榊原飛騨殿、堀三左衛門殿、同五郎右衛門殿、榊原右馬助殿、石川直右衛門殿、御茶道正斎、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「榊原右馬助」を「榊原左馬助」、「石川直右衛門」を「石川三右衛門」と記載。
48			7	5	朝	玄治師、堀式部殿、糸や十右衛門、茶や長右衛門、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
49			7	20	朝	酒井備後殿、吉良上野殿、安藤右京殿、松平出雲殿、酒井蔵人殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
50			7	26	朝	松平筑前殿、高木筑後殿、内藤外記殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
51			7	27	朝	松平右衛門大夫殿、松平甲斐殿、松平主膳殿、松平左衛門殿、加々爪民部殿、菅谷宗勝、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「松平甲斐」を「松平甲斐守」、「松平左衛門」を「松平左衛門佐」、「菅谷宗勝」を「曾谷宗勝」と記載。
52			7	28	朝	永井信濃守殿、柳生但馬殿、神尾備前殿、藤重藤言、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「永井信濃守」を「永井信濃」と記載。
53			8	4	朝	土屋民部殿、京極主膳殿、神尾主水殿、土屋兵部殿、安藤次右衛門殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「土屋兵部」を「土や兵部」と記載。
54			8	7	朝	石川八左衛門殿、朝倉仁左衛門殿、松平伊賀殿、加藤式部殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
55			8	8	朝	黒田甲斐殿、多賀左近殿、桑山修理殿、	『小堀家所蔵茶会記C本』	
56			8	13	朝	土井遠江守殿、加々爪民部殿、後藤庄三郎、山中宗斎、升屋道勾、	『小堀家所蔵茶会記C本』	『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』は「山中宗斎」を「山中泉斎」、「升屋道勾」を「もや道勾」と記載。
57	寛永20	1643	3	13	朝	内田信濃守、斎藤摂津守、岡田淡路守、	『大有宗甫居士茶具置合』	
58			3	13	晩	松平陸奥守、内藤外記、松平越前守、吉田主膳守、	『大有宗甫居士茶具置合』	
59			3	14	晩	牧野内匠、(土岐山城守)、高木九郎介、小浜久太郎、	『大有宗甫居士茶具置合』	「土岐山城守」は「茶具置合扣」から補足。
60			3	16	朝	道也、今枝式部、玄团、脇田半兵衛、	『大有宗甫居士茶具置合』	「道也」を「遠州茶之留」と「遠宗拾遺 百会」は「道巴」と記載。「今枝式部」を「茶具置合扣」と「遠州道具置合」は「今枝民部」と記載。「玄团」を「遠宗拾遺 百会」は「玄円」と記載。
61			3	27	朝	沢庵和尚、堀田加賀守、久大夫、同五郎左衛門、上柳彦兵衛、	『大有宗甫居士茶具置合』	「久大夫」を「茶具置合扣」と「遠州茶之留」と「遠州道具置合」は「喜多見久太夫」と記載。「上柳彦兵衛」右脇に「遠州茶之留」は「茶ノキ」と傍注あり。
62			4	29	朝	記載なし、	『大有宗甫居士茶具置合』	

ID	年代	西暦	月	日	時間	参 会 客 名	底 本	備 考
63			4	1	晩	酒井讃岐守、同信濃守、同老岐守、同和泉守、吉良若狭守、	『大有宗甫居士茶具置合』	
64			4	4	朝	日根野織部、京極主膳、日根次右衛門、京極甚十郎、	『大有宗甫居士茶具置合』	「日根次右衛門」を『遠州茶之留』と『遠州道具置合』は「日根野次右衛門」、『遠宗拾遺 百会』は「日根次郎右衛門」と記載。
65			4	7	朝	松平式部、貞伊宮内、	『大有宗甫居士茶具置合』	「松平式部」を『茶具置合扣』は「松平民部」と記載。「貞伊宮内」に「茶具置合扣」は「ナライ」と読み仮名付与、「サカイ」の誤りか。
66			4	8	朝	牧野佐渡守、小出越中守、板倉市正、牧野八大夫、	『大有宗甫居士茶具置合』	
67			4	9	朝	升や道勾、御茶堂休盛、同利斎、同休務、同養古、	『大有宗甫居士茶具置合』	
68			4	12	朝	酒井宮内殿、同長門殿、	『大有宗甫居士茶具置合』	
69			4	18	朝	松平隠岐守、同美濃守、加藤勘介、柳生但馬守、	『大有宗甫居士茶具置合』	
70			4	22	晩	石川主殿介、大久保右京、石川播磨守、大久保惣三郎、石川阿波守、同勘左衛門、	『大有宗甫居士茶具置合』	「石川主殿介」を『遠州茶之留』と『遠宗拾遺 百会』は「石川主殿頭」と記載。「同(石川)勘左衛門」を『遠州茶之留』と『遠州道具置合』は「同(石川)勘十郎」、『遠宗拾遺 百会』は「同(石川)惣十郎」と記載。
71			4	23	晩	堀加賀守、喜田見久大夫、水野口左衛門、上柳彦兵衛、	『大有宗甫居士茶具置合』	□は虫損部分。「堀加賀守」を『茶具置合扣』と『遠州茶之留』と『遠州道具置合』と『遠宗拾遺 百会』は「堀田加賀守」と記載。「喜田見久大夫」を『茶具置合扣』と『遠州茶之留』と『遠州道具置合』と『遠宗拾遺 百会』は「喜多見久大夫」と記載。「水野口左衛門」を『茶具置合扣』と『遠州茶之留』と『遠州道具置合』と『遠宗拾遺 百会』は「水野小左衛門」と記載。
72			4	25	朝	本阿弥三郎兵衛、同十兵衛、藤重藤権、亀や新兵衛、口村彦左衛門、	『大有宗甫居士茶具置合』	□は虫損部分。「口村彦左衛門」を『遠州茶之留』と『遠州道具置合』は「北村彦左衛門」、『遠宗拾遺 百会』は「喜多村彦左衛門」と記載。
73			4	26	朝	松平伊豆守、安藤、松平佐渡守、同二左衛門、久志本式部、(御茶道正雲、)	『大有宗甫居士茶具置合』	『遠宗拾遺 百会』は「4月29日」で記載。「安藤」を『遠州茶之留』と『遠州道具置合』と『遠宗拾遺 百会』は「安藤右京進」と記載。「同(松平)二左衛門」を『遠州茶之留』と『遠州道具置合』と『遠宗拾遺 百会』は「同(松平)三左衛門」と記載。『遠州茶之留』と『遠州道具置合』は更に「駿河(川)笑雲」追加記載。『遠州道具置合』は更に「御茶道正雲」を追加記載。
74			4	29	朝	文殊院、見樹院、金地院、正恩、覚恩、	『大有宗甫居士茶具置合』	『遠宗拾遺 百会』は「4月26日」で記載。
75			5	23	朝	朽木民部、平野権平、加々爪甲斐、狩野采女、	『大有宗甫居士茶具置合』	
76			5	26	朝	阿部豊後、安藤右京、松平出雲、舟越三郎四郎、	『大有宗甫居士茶具置合』	『茶具置合扣』は「9月26日」で記載。
77			5	27	朝	久世大和守、八木甚十郎、牧野織部、木原奎介、	『大有宗甫居士茶具置合』	「八木甚十郎」を『遠州茶之留』と『遠州道具置合』は「八木勘十郎」、『遠宗拾遺 百会』は「八木八十郎」と記載。
78			5	30	朝	板防州、吉良口口、太田口馬介、徳山五兵衛、	『大有宗甫居士茶具置合』	□は虫損部分。「吉良口口」を『遠州道具置合』は「吉良若狭守」と記載。「太田口馬介」を『遠州茶之留』と『遠州道具置合』と『遠宗拾遺 百会』は「太田左馬之助」と記載。
79			6	3	朝	堀田加賀守、北見五郎左衛門、水野小左衛門、	『大有宗甫居士茶具置合』	
80			7	27	朝	伊井靱負、板防州、伊井兵部、森川金右衛門、成瀬隼人、石谷十蔵、	『大有宗甫居士茶具置合』	
81			8	8	朝	松平肥前守、松平安芸守、松平飛騨守、高木筑後守、内藤外記、	国立国会図書館所蔵『遠州茶之留』	
82			8	26	朝	黒田口口口佐、酒井讃岐守、北条出羽守、小出対馬守、	『大有宗甫居士茶具置合』	□は虫損部分。
83			9	3	朝	土井大炊頭、松平右衛門大夫、武田道安、山本道白、(儒者道春、)	『大有宗甫居士茶具置合』	「儒者道春」は『遠州茶之留』から補足。
84			11	9	朝	堀田加賀守殿、加々爪甲斐守殿、舟越三郎四郎殿、北見五郎左衛門殿、水野小左衛門殿、	『大有宗甫居士茶具置合』	
85			11	11	晩	永井信濃守殿、内藤志摩守殿、永井大学殿、内藤三十郎殿、御茶堂宗伝、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	『大有宗甫居士茶具置合』は「11月17日」で記載。
86			11	12	朝	榊原飛騨守殿、堀三右衛門殿、喜多見久大夫殿、榊原左衛門佐殿、内藤庄兵衛殿、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	『大有宗甫居士茶具置合』は「11月13日」、『遠宗拾遺 百会』は「11月18日」で記載。
87			11	16	朝	朽木民部殿、小出越中殿、岡田淡路殿、平野権平殿、狩野法眼、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	『遠宗拾遺 百会』は「11月19日」で記載。『大有宗甫居士茶具置合』は「狩野法眼」欠如。
88			11	17	昼	稲葉美濃守殿、榊原飛騨殿、同左衛門佐殿、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	

ID	年代	西暦	月	日	時間	参 会 客 名	底 本	備 考
89			12	2	朝	阿部豊後殿、安藤右京殿、安藤次右衛門殿、御茶室宗門、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	『大有宗甫居士茶具置合』は「12月13日」で記載。
90			12	10	朝	毛利長門殿、石川孫左衛門殿、見樹院、完道主殿、梨羽頼母、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	
91			12	14	晩	内田信濃守、斎藤摂津守殿、大草主膳殿、大久保宮内殿、町野左近殿、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	
92			12	18	晩	松平伊豆守殿、松平佐渡殿、松平主膳殿、久志本式部殿、伯安、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	
93			12	21	朝	玉虫八左衛門殿、大久保平六殿、大岡忠四郎、遠山十右衛門殿、長谷川長五郎殿、大川原源五左衛門殿、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	
94			12	23	朝	久世大和殿、牧野佐渡殿、小出越中殿、八木勘十郎殿、牧野織部殿、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	
95			12	23	晩	神尾五助殿、木原木工、鈴木修理、樽屋藤左衛門、伊阿弥修理、茶屋四郎次郎、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	
96			12	26	朝	土屋民部殿、同大和守殿、同兵部殿、神尾主水殿、星合太郎兵衛殿、上柳彦兵衛、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	
97	寛永21	1644	1	1	晩	榊原飛騨殿、同左衛門佐殿、舟越三郎四郎殿、星合太郎平衛殿、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	
98			1	3	晩	堀田加賀守殿、花房勘右衛門殿、水野庄左衛門殿、上柳彦兵衛殿、御茶之時 宗門、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	
99			1	5	晩	加々爪甲斐殿、安藤右京殿、喜多見五郎左衛門殿、喜多見久大夫殿、伊丹蔵人殿、堀三右衛門殿、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	
100			1	6	晩	松平新太郎殿、神尾備前殿、能勢小十郎殿、神尾内膳殿、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	「能勢小十郎」を『大有宗甫居士茶具置合』は「能勢小右衛門」と記載。
101			1	23	朝	朽木民部殿、浅野因幡殿、平野権平殿、岡田淡路殿、加々爪甲斐殿、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	
102			2	4	晩	保科肥後守殿、吉良若狭殿、安藤右京殿、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	
103			2	5	朝	松平阿波殿、田中主殿殿、堀内宗兵衛殿、	土浦市立博物館所蔵『於江戸茶之湯置合帳』	『遠州茶之留』と『遠宗拾遺 百会』は「2月7日」で記載。「堀内宗兵衛」を『於江戸遠州道具置合』は「堀内惣兵衛」と記載。
104			9	15	朝	記載なし、	『小堀家所蔵茶会記F本』	
105			12	18	朝	記載なし、	『小堀家所蔵茶会記F本』	口切
105	正保02	1645	1	5	晩		『小堀家所蔵茶会記F本』	前田光高の茶会に際して道具を置き合わせた際の記録。

※1採録と記載は小堀宗慶編『小堀遠州茶会記集成』（一九九七年、主婦の友社）に従った。

底本の内、小堀家所蔵本と『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』以外は書名の前に所蔵先を付与した。標題の無いものについては、『小堀遠州茶会記集成』での記号付与に従って、便宜上の名称を付けた。

『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』の所蔵先と典拠は※2参照。

※2備考欄の記載についても小堀宗慶編『小堀遠州茶会記集成』の記載に原則的に従い、適時補足を行なった。なお、備考欄に掲げた諸本の所蔵先と典拠は下記の通りである。

『遠州茶之留』…国立国会図書館。

『遠宗拾遺 百会』…国立国会図書館。

『於江戸遠州道具置合』…国立国会図書館。

『遠州道具置合』…国立国会図書館

『茶具置合扣』…小浜市立図書館。

『近江孤蓬庵小堀遠州茶会記』…滋賀県長浜市浅井町近江孤蓬庵所蔵。本資料では、堤由紀子翻刻紹介「近江孤蓬庵小堀遠州茶会記」（『野村美術館紀要』第三号所収、一九九四年）を用いた。

(資料2) 小堀遠州の江戸在府時における自会記人名一覧

ID	分類	人 名	年 月 日	会数	人 名 解 説
1	⑧	村井不及	寛永8年9/21、	1(12)	
2	①	堀田加賀守	寛永15年12/29、寛永17年5/22、寛永20年3/27、4/23、6/3、11/9、寛永21年1/3、	7	堀田正盛、従四位下加賀守、下総国佐倉藩藩主。寛永10(1633)年から老中職を勤めた。家光の六人衆の一人。
3	②	嶋四郎左衛門	寛永15年12/29、	1	島三安、旗本。寛永10(1633)年から遠州とともに近江国水口城普請奉行職を勤め、後に御使番役を勤めた。
4	⑧	岡宗員	寛永15年12/29、	1	
5	①	松平右衛門大夫	寛永15年12/30、寛永17年7/27、寛永20年9/3、	3(7)	松平右衛門佐正綱、後に右衛門大夫と称す。相模国甘縄藩藩主。慶長14(1609)年勘定奉行職に就任。
6	⑧	加々爪式部	寛永15年12/30、	1	
7	②	堀式部	寛永15年12/30、寛永17年6/1、6/10、7/5、	4(6)	堀式部少輔直之、三右衛門、旗本。寛永15(1638)年まで江戸北町奉行職を勤めた後、寺社奉行職に移った。
8	①	加々爪甲斐守	寛永15年12/30、寛永17年5/27、寛永20年5/23、11/9、寛永21年1/5、1/23、	6	加賀爪甲斐守直澄、武蔵国・相模国・下総国等に所領があった。寛文元(1661)年から寺社奉行職就任。
9	④	上柳彦兵衛	寛永15年12/30、寛永16年1/7、寛永17年5/27、寛永20年3/27、4/23、12/26、寛永21年1/3、	7(31)	京都の糸割符商人。幕府御用達の呉服商。
10	②	佐久間将監	寛永16年1/1、寛永17年5/28、	2	佐久間真勝、従五位下伊予守、後に将監、旗本。御使番役を勤めた。隠居後は大徳寺龍光院に住す。
11	②	舟越三郎四郎	寛永16年1/1、寛永17年5/28、寛永20年5/26、11/9、寛永21年1/1、	5	舟越三郎四郎永景、従五位下伊予守、旗本。寛永15(1638)年から作事奉行職を勤めた。遠州の高弟。
12	②	八木勘四郎	寛永16年1/1、寛永17年5/28、寛永20年5/27、12/23、	4	八木守直、勘十郎、旗本。寛永15(1638)年から東海寺普請・作事奉行職を勤め、後に山田奉行職に移った。
13	②	北見久大夫	寛永16年1/1、寛永17年5/22、寛永20年3/27、4/23、11/12、寛永21年1/5、	6	北見久大夫重勝、旗本。寛永9(1632)年から御書院番役を勤め、寛永15(1638)年から御目付役を勤めた。
14	①	池田内蔵助	寛永16年1/3、寛永17年6/5、	2(3)	池田重政、内蔵助、播磨国新宮藩藩主。小堀遠州の娘婿。
15	③	小堀左馬助	寛永16年1/3、	1	小堀左馬助正春、旗本。遠州の末弟。遠州没後、遠州が代官職を勤めた幕府直轄領代官職を勤めた。
16	②	西尾権之助	寛永16年1/3、	1	西尾盛教、旗本。美濃国に5000石知行。
17	③	小堀大膳	寛永16年1/3、	1(3)	小堀大膳正之、従五位下備中守、旗本。遠州長男。遠州流二代目。
18	③	同(小堀)九郎兵衛	寛永16年1/3、寛永17年6/5、	2(4)	小堀正十、旗本。遠州の甥。近江国浅井郡に知行地があった。
19	④	橘や宗玄	寛永16年1/3、	1(34)	橘屋宗玄、糸割符の呉服商。遠州の御茶方で、茶室の管理など遠州の側近として活躍。
20	①	永井信濃	寛永16年1/4、寛永17年7/28、寛永20年11/11、	3(16)	永井信濃守尚政、下総国古河藩藩主。寛永10(1633)年山城国淀藩に移封。寛永10年まで老中職を勤めた。
21	⑧	島田運也	寛永16年1/4、	1	
22	⑧	山田宗縁	寛永16年1/4、	1	
23	④	茶屋長右衛門	寛永16年1/4、寛永17年7/5、	2	京都の糸割符商人。幕府御用達の呉服商茶屋四郎二郎の一族。
24	①	柳生但馬	寛永16年1/5、寛永17年7/28、寛永20年4/18、	3(4)	柳生宗矩、従五位下但馬守、大和国柳生藩藩主。寛永9(1632)年から大目付役就任。
25	②	同(柳生)十兵衛	寛永16年1/5、	1	柳生十兵衛光厳、旗本。柳生但馬守宗矩息。寛永15(1638)年から御書院番役を勤めた。
26	②	加藤勘助	寛永16年1/5、寛永20年4/18、	2	天正5(1577)年から徳川家康に仕え、後に將軍家馬術指南役を勤めた。京都在。
27	⑧	長谷川等書	寛永16年1/5、	1	
28	①	松平下総守	寛永16年1/7、寛永17年6/10、	2(6)	松平(奥平)忠明、大和国郡山藩藩主。寛永16(1639)年播磨国姫路藩に移封。
29	①	秋元但馬	寛永16年1/7、	1	秋元泰朝、従五位下但馬守、甲斐国谷村藩藩主。
30	⑧	山田久弥	寛永16年1/7、	1	
31	②	曾我丹波	寛永16年1/9、	1(3)	曾我古祐、従五位下丹波守、旗本。寛永10年長崎倭奉行職となり、寛永11年から大坂西町奉行職を勤めた。
32	②	石川土佐	寛永16年1/9、	1(6)	石川勝政、従五位下土佐守、旗本。寛永10(1633)年から堀奉行職を勤めた。
33	②	榊原左衛門佐	寛永16年1/9、寛永17年6/1、7/2、寛永20年11/12、11/17、寛永21年1/1、	6(8)	榊原左衛門佐職直、旗本。従五位下飛騨守、寛永15(1638)年まで長崎奉行職勤め、後に近江水口城番役を勤めた。
34	⑧	妙道	寛永16年1/9、	1	
35	⑤	御茶堂正斎	寛永16年1/9、寛永17年7/2、	2	
36	①	松平筑前	寛永16年1/12、寛永17年7/26、	2(3)	松平筑前守光高、前田光高。正四位下少将、寛永16(1639)年から加賀国金沢藩藩主。
37	①	松平飛騨	寛永16年1/12、寛永20年8/8、	2	前田利治、従四位下飛騨守、前田利常三男。寛永16(1639)年から加賀国大聖寺藩藩主。
38	②	中根大隅	寛永16年1/12、	1	中根正成、従五位下大隅守、旗本。寛永13(1636)年から御書院番頭役を勤め、寛永17年から大番頭役に移った。
39	②	高木筑後	寛永16年1/12、寛永17年7/26、寛永20年8/8、	3(4)	高木正次、従五位下筑後守、旗本。寛永9(1632)年から寛永19(1642)年まで佐渡奉行職を勤めた。
40	②	内藤内記	寛永16年1/12、寛永17年7/26、寛永20年3/13、8/8、	4	内藤正重、致仕後齋斎、従五位下外記、旗本。御持弓頭役や御使役を歴任した。
41	①	菅沼織部	寛永16年1/13、	1(3)	菅沼貞芳、従五位下織部正、丹波国亀山藩藩主。

ID	分類	人 名	年 月 日	会数	人 名 解 説
42	②	酒井因幡	寛永16年1/13、	1	酒井忠知、従五位下因幡守、旗本。作事奉行職等を勤め、寛永16(1639)年5月江戸北町奉行職を勤めた。
43	①	菅沼右近	寛永16年1/13、	1(2)	菅沼左近定昭、従五位下左近将監、丹波国亀山藩藩主。
44	②	田中主殿	寛永16年1/13、寛永21年2/5、	2	田中吉宣、従五位下主殿頭、旗本。御書院番役を勤め、寛永19(1614)年から大番頭役を勤めた。
45	②	本多美作	寛永16年1/13、	1	本多忠相、従五位下美作守、旗本。寛文10(1670)年江戸城御留守役を勤めた。
46	①	渡辺一学	寛永16年1/16、寛永17年5/29、	2	渡辺一学、紀伊徳川家臣。紀伊国和歌山藩藩主徳川頼宣・光貞に仕えた。
47	⑧	薩山士佐	寛永16年1/16、	1	
48	①	小笠原久兵衛	寛永16年1/16、	1	小笠原良政、紀伊徳川家に仕え、紀伊国和歌山藩重臣。1000石知行。
49	⑧	いしや了庵	寛永16年1/16、	1	
50	③	小堀右近	寛永16年1/16、	1	遠州側室清応院の甥。後に遠州の子として紀伊徳川家に1000石で召し抱えられた。
51	②	神尾備前	寛永16年1/20、寛永17年7/28、寛永21年1/6、	3(4)	神尾元勝、従五位下備前守、旗本。寛永11年から長崎奉行職勤め、寛永15年に江戸南町奉行職に移った。
52	③	小倉忠左衛門	寛永16年1/20、	1	小倉忠右衛門、旗本。遠州の甥。小倉家に養子に出、西の丸御書院番役や作事奉行職等を歴任した。
53	④	後藤庄三郎	寛永16年1/20、寛永17年8/13、	2	後藤光次、金座の頭取。
54	③	小堀三郎兵衛	寛永16年1/20、	1	小堀政孝、旗本。御小姓組番士役を勤めた。
55	⑥	狩野探幽法眼	寛永16年1/20、寛永17年5/28、寛永20年5/23、11/16、	4(8)	狩野探幽、寛永15(1628)年法眼となり、寛文2(1662)年に法印に叙任。幕府の絵師。鍛冶橋狩野派の祖。
56	①	松平伊豆	寛永16年1/21、寛永20年4/26、12/18、	3	松平伊豆守信綱、武蔵国川越藩藩主。寛永10(1633)年から老中職を勤めた。家光の六人衆の一人。
57	⑧	同(松平)左門	寛永16年1/21、	1	
58	①	同(松平)甲斐	寛永16年1/21、寛永17年7/27、	2	松平甲斐守輝綱、松平伊豆守信綱の嫡男。寛文2(1662)年遺領継ぎ、武蔵国川越藩藩主。
59	⑧	同(松平)三記	寛永16年1/21、	1	
60	②	同(松平)右京	寛永16年1/21、	1	松平(福金)康盛、従五位下右京亮、旗本。御小姓組役を勤め、後に江戸城造宮奉行職を勤めた。
61	⑥	久志本式部	寛永16年1/21、寛永20年4/26、12/18、	3	久志本式部少輔常尹。寛永8(1631)年徳川秀忠の病を直したの機に、寛永13(1636)年から將軍家侍医を勤めた。
62	①	加藤式部	寛永16年1/23、寛永17年8/7、	2	加藤明成、従五位下式部少輔、後に従四位下侍従、会津若松藩藩主。寛永20(1643)年改易となった。
63	①	松平伊賀	寛永16年1/23、寛永17年8/7、	2	松平伊賀守忠晴、遠江国掛川藩藩主。慶安元(1648)年に丹波国亀山藩に移封となった。
64	②	石川八左衛門	寛永16年1/23、寛永17年8/7、	2	石川政次、従五位下大隅守、旗本。寛永18(1641)年から山田奉行職を勤めた。
65	⑧	升屋道勾	寛永16年1/23、寛永17年8/13、寛永20年4/9、	3	
66	②	斎藤伊豆	寛永16年1/26、	1	斎藤宗利、従五位下伊豆守、旗本。寛永7(1630)年から御侍簡頭役を勤めた。
67	②	同(斎藤)摂津	寛永16年1/26、寛永20年3/13、12/14、	3	斎藤三友、従五位下摂津守、旗本。寛永13年から御徒頭役を勤め、寛永15年から御小姓組番頭役を勤めた。
68	⑧	内藤庄兵衛	寛永16年1/26、寛永20年11/12、	2(3)	
69	②	稲葉権之佐	寛永16年1/26、	1	稲葉正休、従五位下石見守、旗本。後に若年寄職を勤めた。
70	②	堀三左衛門	寛永16年1/26、寛永17年6/5、7/2、	3(4)	堀三左衛門直氏、旗本。御書院番役を勤めた。
71	②	牧野内匠	寛永16年1/29、寛永20年3/14、	2	牧野信成、従五位下内匠頭、旗本。元和元年に御書院番頭役から大目付役に進み、伏見城守衛役を勤めた。
72	②	同(牧野)織部	寛永16年1/29、寛永17年5/28、寛永20年5/27、12/23、	4	牧野成常、従五位下織部正、旗本。寛永15(1638)年御目付役となり、後に作事奉行職を勤めた。
73	②	花房志摩	寛永16年1/29、	1(2)	花房幸次、従五位下志摩守、旗本。寛永8(1631)年から伊勢国代官職、山田奉行職を勤めた。
74	②	杉浦藏之亮	寛永16年1/29、	1	杉浦正綱、従五位下内蔵允、旗本。万治2(1659)年から甲府城番役を勤め、後に勘定頭役を勤めた。
75	②	吉良若狭守	寛永16年1/29、寛永20年4/1、5/30、寛永21年2/4、	4	吉良義冬、従五位下侍従、若狭守、高家。度々京都へ御使役を勤めた。
76	②	大橋龍慶	寛永16年1/30、	1	大橋法印式部卿重保、寛永11(1634)年法印に叙任。元和3(1617)年から幕府に仕え、將軍家右筆役を勤めた。
77	⑥	玄悦法印	寛永16年1/30、	1	舟橋玄悦、法印、対馬藩藩臣。
78	⑧	小幡孫兵衛	寛永16年1/30、	1	
79	⑧	大川原源五左衛門	寛永16年1/30、寛永20年12/21、	2	
80	⑤	御茶堂宗伝	寛永16年1/30、寛永20年11/11、	2	松平支流櫻井正善、宗伝。慶長13(1608)年から秀忠近侍となり、御茶頭役を勤めた。
81	⑧	神谷式部	寛永16年1/30、	1	
82	①	太田備中	寛永16年2/3、	1(2)	太田資宗、従五位下備中守、家光・家綱の側近。「寛永諸家系図伝」編撰奉行職等を勤めた。
83	①	板倉阿波	寛永16年2/3、	1	板倉重郷、従五位下阿波守、万治元(1658)年から寛文元(1661)年迄寺社奉行職を勤めた。下総国関宿藩藩主。
84	①	同(板倉)主水	寛永16年2/3、	1(2)	板倉重矩、従五位下主水佑、後に従四位下、三河国中島藩藩主。寛文5(1665)年から老中職を勤めた。
85	②	石見十藏	寛永16年2/3、寛永20年7/27、	2	石谷貞清、旗本。寛永10(1633)年御徒頭役から御目付役に進み、正保2(1645)年近江国水口城守衛役に移った。
86	②	津田平左衛門	寛永16年2/3、	1	津田正重、旗本。御連物役や御目付代役を歴任した。
87	②	吉良上野	寛永16年2/4、寛永17年7/20、	2	吉良義綱、従五位下上野介兼侍従、後に従四位下、元和9(1623)年に少将、高家。度々京都へ御使役を勤めた。
88	①	井上河内	寛永16年2/4、	1	井上正利、従五位下河内守、常陸国笠間藩藩主。正保2(1645)年から奏者番役を勤めた。
89	①	水野見物	寛永16年2/4、	1(2)	水野忠善、従五位下監物、寛永15(1628)年駿府城普請奉行職を勤めた。正保2(1645)年から三河国岡崎藩藩主。

ID	分類	人 名	年 月 日	会数	人 名 解 説
90	①	松平出雲	寛永16年2/4、寛永17年7/20、寛永20年5/26、	3	松平勝隆、従五位下出雲守、上総国佐貫藩藩主。寛永12(1635)年から万治2(1659)年迄寺社奉行職を勤めた。
91	①	安藤右京	寛永16年2/4、寛永17年7/20、寛永20年4/26、5/26、 12/2、寛永21年1/5、2/4、	7(9)	安藤重長、従五位下右京亮、上野国高崎藩藩主。明暦3(1657)年まで寺社奉行職を勤めた。
92	①	酒井備後	寛永16年2/5、寛永17年7/20、	2	酒井備後守忠朝、酒井讃岐守忠勝嫡男。寛永12(1635)年から御小姓組番頭役を勤めた。慶安2(1649)年廃嫡。
93	②	同(酒井)老岐	寛永16年2/5、寛永20年4/1、	2	酒井忠重、従五位下老岐守、旗本。正保2(1645)年から大番頭役を勤めた。
94	①	同(酒井)民部正	寛永16年2/5、	1	酒井政時、酒井宮内大輔忠勝の弟。酒井宮内大輔忠勝家臣。
95	②	同(酒井)蔵人	寛永16年2/5、寛永17年7/20、	2	従五位下蔵人、旗本。御書院番役を勤め、万治2(1659)年から御書院番番頭役に移った。
96	①	松平越前	寛永16年2/7、寛永20年3/13、	2(3)	伊達光宗、従五位下越前守、後に従四位下侍従、伊達忠宗嫡子。
97	①	同(松平)万助	寛永16年2/7、	1	松平忠俱、正保3(1646)年従五位下遠江守叙任。寛永16(1639)年から信濃国飯山藩藩主。参会時6才。
98	①	織田左衛門佐	寛永16年2/7、	1(2)	織田長政、織田有楽四男。最初従五位下丹後守、後に左衛門佐、大和国戒成藩藩主。
99	⑥	(武田)道安	寛永16年2/7、寛永20年9/3、	2(13)	武田信重、法眼、後に法印に昇叙、幕府・禁裏に仕えた典医。
100	①	朽木民部	寛永16年2/8、寛永17年6/6、寛永20年5/23、11/16、寛 永21年1/23、	5	朽木植綱、従五位下民部少輔、常陸国土浦藩藩主。承応元(1652)年から奏者番役を勤めた。
101	②	水野右京	寛永16年2/8、	1	水野勝忠、従五位下右京亮、旗本。寛永16(1639)年から御書院番役を勤め、後に寄合役に移った。
102	②	神尾主水	寛永16年2/8、寛永17年8/4、寛永20年12/26、	3	神尾元珍、従五位下若狭守、旗本。万治3(1660)年東叡山諸堂修補奉行職となり、後に御使番役を勤めた。
103	②	小出越中	寛永16年2/8、寛永20年4/8、11/16、12/23、	4	小出尹貞、従五位下越中守、旗本。寛永13年から御使頭役を勤め、明暦元(1655)年御小姓組番頭役に移った。
104	②	大久保久(宮)内	寛永16年2/8、寛永20年12/14、	2	大久保正朝、従五位下宮内少輔、旗本。御書院番役を勤め、寛文元(1661)年から綱吉付で家老職を勤めた。
105	①	立花立斎	寛永16年2/10、	1	立花宗茂、従五位下飛騨守、筑後国柳川藩藩主。寛永19(1642)年卒。
106	①	永井左(右)近	寛永16年2/10、	1(2)	永井尚征、従五位下右近大夫、山城国淀藩藩主。寛文9(1669)年丹後国宮津藩に移封となった。
107	①	本田(多)下総	寛永16年2/10、	1	本多俊次、従五位下下総守、伊勢国亀山藩藩主。慶安4(1651)年近江国膳所藩に移封となった。
108	①	松平能登	寛永16年2/10、	1(2)	松平久松)定次、従五位下能登守、慶安2(1649)年に三河国刈谷藩に新封、藩主。
109	②	永井大和	寛永16年2/10、	1	永井尚保、従五位下大和守、旗本。寛永8(1631)年から御小姓役を勤め、後に将軍家近侍に移った。
110	②	小浜民部	寛永16年2/12、	1(6)	小浜光隆、従五位下民部少輔、旗本。摂津・伊勢に5000石余知行。
111	①	堀越中	寛永16年2/12、	1	堀利長、最初従五位下対馬守、後に越中守、下野国烏山藩藩主。
112	②	小浜久太郎	寛永16年2/12、寛永20年3/14、	2	小浜嘉隆、旗本。摂津国・伊勢国に5000石知行。大坂の船手番役を勤めた。
113	①	酒井宮内	寛永16年2/13、寛永20年4/12、	2	酒井忠勝、従五位下宮内大輔、後に従四位下、出羽国庄内藩藩主。
114	①	同(酒井)摂津守	寛永16年2/13、	1	酒井忠常、従五位下摂津守、酒井宮内大輔忠勝嫡男。後に出羽国庄内藩藩主。
115	②	同(酒井)長門守	寛永16年2/13、寛永20年4/12、	2(3)	酒井忠重、従五位下長門守、旗本。御小姓役を勤め、後に徳川将軍家近侍となった。寛文5(1665)年改易。
116	②	松平主膳	寛永16年2/13、寛永17年7/27、寛永20年12/18、	3	松平(深溝)忠良、従五位下主膳正。慶安2(1649)年御目付役となり、寛文12(1672)年から御先鋒砲頭役を勤めた。
117	④	後藤親乗	寛永16年2/13、寛永17年6/5、	2(8)	後藤理兵衛、利兵衛、彫金の後藤佐乗の7代目。遠州の依頼を受け多くの金物を製作した。
118	①	石川弾正	寛永16年2/14、	1(3)	石川廉勝、従五位下弾正大弼、石川主殿頭忠総嫡男。近江国膳所藩藩主。慶安4(1651)年伊勢国亀山藩に移封。
119	①	同(石川)権十郎	寛永16年2/14、寛永20年4/22、	2	石川総長、従五位下播磨守、寛永10(1633)年から勘定奉行職勤めた。慶安4(1651)年から伊勢国神戸藩藩主。
120	②	森川金石衛門	寛永16年2/14、寛永20年7/27、	2(3)	森川氏信、旗本。将軍近侍役として度々将軍の供奉役を勤めた。正保2(1645)年卒。
121	②	上野八郎左衛門	寛永16年2/14、寛永20年4/22、	2	石川貞富、従五位下阿波守、旗本。寛永17年から御書院番番頭役を勤め、慶安元年から大番頭役を勤めた。
122	④	太鼓打左吉	寛永16年2/14、	1	親世重次、佐吉。親世摩の太鼓打。
123	①	小出大和	寛永16年2/15、	1	小出吉英、従五位下大和守、但馬国出石藩藩主。
124	②	同(小出)大隅	寛永16年2/15、	1	小出三尹、従五位下大隅守、旗本。寛永12(1635)年から遠江国以東の郡奉行職を勤めた。
125	②	同(小出)木工	寛永16年2/15、	1	小出木工助吉成、小出大和守吉英の弟、旗本。御目付役を勤めた。
126	①	戸川士佐	寛永16年2/15、	1	戸川政安、従五位下士佐守、備中国庭瀬藩藩主。
127	⑧	能勢小十郎	寛永16年2/15、寛永21年1/6、	1	能勢頼隆、旗本。御小姓役を勤め、後に御書院番役を勤めた。
128	②	伊丹蔵人	寛永16年2/16、寛永21年1/5、	2	伊丹勝長、従五位下播磨守、旗本。慶安3(1650)年から勘定奉行職勤め、佐渡奉行職も兼任した。
129	⑧	櫛半十郎	寛永16年2/16、	1	
130	②	木原木工	寛永16年2/16、寛永20年5/27、12/23、	3	木原義久、従五位下木工允、旗本。大工頭役を勤め、浜松城普請奉行職を勤めた。
131	④	藤重等言(藤藏)	寛永16年2/16、寛永17年7/28、寛永20年4/25、	3(4)	藤重藤藏、奈良の塗師で藤重藤元の子。「中次の茶入れ(漆を使つての修復法)」を考案した。
132	⑤	(御茶堂)宗円	寛永16年2/16、寛永20年12/2、寛永21年1/3、	3(4)	鳴海寿幸、慶長14(1609)年から御茶頭付属役として近侍。
133	②	阿部四郎五郎	寛永16年2/19、	1	阿部正之、旗本。御使役や普請奉行職を歴任した。
134	②	島等甫	寛永16年2/19、	1(2)	島正直、旗本島一正長子、跡を継ぐ前に寛永20(1643)年に卒した。
135	⑧	朽木出雲	寛永16年2/19、	1	

ID	分類	人 名	年 月 日	会数	人 名 解 説
136	⑥	物よみ宗春	寛永16年2/19、寛永20年9/3、	2(3)	林鶯峯。儒者。父林羅山に従って江戸に住し、徳川家光に仕えた。
137	⑤	御茶堂了雲	寛永16年2/19、	1	二代目野実雲。寛永20年に遺跡を継ぎ、御茶頭役を勤めた。
138	②	渡辺図書	寛永16年2/21、	1	従五位下図書頭、旗本。寛永9(1632)年御目付役から御弓頭役に転じた。
139	②	大沢左(右)京	寛永16年2/21、	1	大沢基重、従五位下侍従兼右京亮、正保2(1645)年従四位下に昇叙、旗本、度々京都への御使役を勤めた。
140	②	馬場三郎左衛門	寛永16年2/21、	1	馬場利重、旗本。寛永9(1632)年御使番役から御目付役に転じ、寛永15(1638)年から長崎奉行職を勤めた。
141	②	青山善四郎	寛永16年2/21、	1	青山重長、旗本。徳川秀忠・家光に仕え、御使番役・御目付役を歴任した。
142	②	花房勘右衛門	寛永16年2/21、寛永21年1/3、	2	花房正盛、旗本。寛永10(1633)年御使番役から御目付役に転じ、後に佐渡の銀山奉行職を勤めた。
143	①	(植)村出羽守	寛永16年2/25、	1(2)	植村家政、従五位下出羽守、大和国高取藩藩主。
144	②	本多豊前	寛永16年2/25、	1	本多正貫、従五位下豊前守、旗本。寛永12(1635)年から御書院番頭役を勤め、寛永19年から大番頭役を勤めた。
145	②	中山勘解由	寛永16年2/25、	1(2)	中山直定、旗本。寛永10(1633)年から御小姓組組頭役を勤め、寛永15(1638)年から御先弓頭役に移った。
146	⑤	御茶道春貞	寛永16年2/25、	1	
147	①	毛利甲斐	寛永16年3/2、	1	毛利秀元、正三位甲斐守、長門国長府藩藩主。当時の大名茶人の一人。
148	②	向井将監	寛永16年3/2、	1(2)	向井忠勝、水軍の将。大坂の役で軍船を操り軍功あり。寛永2(1625)年から約6000知行。
149	②	松平因幡	寛永16年3/2、	1	松平勝義、従五位下因幡守、旗本。下総国香取郡多古を居所とし、承応2(1653)年から大番頭役を勤めた。
150	④	本阿弥光伯	寛永16年3/2、	1	本阿弥家分家筋の人物。
151	⑦	観音寺	寛永16年3/2、	1	
152	②	小野宗左衛門	寛永16年3/2、	1(9)	小野貞則、宗左衛門、旗本。近江国大津代官職を勤めていた。参会時は子息が代官職を継いでいる。
153	⑦	本住坊	寛永16年3/2、	1	
154	②	小野長左衛門	寛永16年3/2、	1(3)	小野貞正、旗本。小野貞則の息。近江国で代官職を勤めた。
155	④	平野藤四郎	寛永16年3/2、	1(4)	豊臣秀吉に仕えて代官職を勤め、命により平野から改名した末吉の一族。
156	②	小野喜左衛門	寛永16年3/2、	1	小野貞久、旗本。小野貞則の孫。寛永18(1641)年に貞則の遺跡継ぎ、近江国大津代官職を勤めた。
157	⑧	篠井弥三郎	寛永16年3/2、	1	
158	①	市橋下總守	寛永16年3/5、	1	市橋長政、従五位下上總守、近江国仁正寺藩藩主。
159	①	同(市橋)兵吉	寛永16年3/5、	1	市橋政信、従五位下下總守、市橋上總守長政息。慶安元(1648)年に遺領継ぎ、近江国仁正寺藩藩主。
160	②	同(市橋)三四郎	寛永16年3/5、	1	市橋長吉、旗本。近江国仁正寺藩の内に1000石分与され、知行。
161	②	岡田将監	寛永16年3/5、	1(3)	岡田義政、旗本。寛永11年から近江国多賀社や伊勢内宮造営奉行職等を歴任し、後に御勘定頭役に移った。
162	⑧	貝兵部	寛永16年3/5、	1	
163	⑧	小野小左衛門	寛永16年5/22、	1	
164	①	浅野因幡	寛永17年5/27、寛永21年1/23、	2	浅野長治、従五位下因幡守、備後国三次藩藩主。
165	②	平野権平	寛永17年5/27、寛永20年5/23、11/16、寛永21年1/23、	4(7)	平野長勝、権平、旗本。父は賤ヶ岳七本槍の一人平野遠江守長泰。
166	②	加々八民部	寛永17年5/27、7/27、8/13、	3(4)	加賀八忠澄、従五位下民部少輔、旗本。御目付役を勤め、寛永8年から寛永15年まで江戸南町奉行職を勤めた。
167	①	菅沼宮内	寛永17年5/29、	1	菅沼定堅、九兵衛、紀伊国和歌山藩藩主徳川頼宣に仕え、家臣を勤めた。
168	③	小堀左近	寛永17年5/29、	1	
169	④	茶や四郎次郎	寛永17年5/29、寛永20年12/23、	2(12)	茶屋四郎二郎、京都の糸刺符商人。幕府御用達の呉服商で茶屋三代目当主。
170	④	同(茶屋)新四郎	寛永17年5/29、	1(3)	
171	①	稲葉美濃	寛永17年6/1、寛永20年11/17、	2	稲葉正則、従五位下美濃守、後に従四位下侍従、相模国小田原藩藩主。明暦3(1657)年から老中職を勤めた。
172	②	北見五郎左衛門	寛永17年6/1、寛永20年3/27、6/3、11/9、寛永21年1/5、	5(9)	北見重恒、旗本。北見重勝の弟。御目付役、屋敷奉行職や普請奉行職を歴任した。
173	①	久世大和	寛永17年6/6、寛永20年5/27、12/23、	3	久世広之、従五位下大和守、寛文9(1669)年から下総国関宿藩藩主。寛文3(1663)年から老中職を勤めた。
174	②	山口出雲	寛永17年6/6、	1	山口直治、従五位下出雲守、旗本。寛文元(1661)年から徳川綱重付属となり、家老職を勤めた。
175	②	京極左近	寛永17年6/6、	1	京極高勝、明暦元(1655)年従五位下信濃守に叙任、旗本。
176	①	石川主殿	寛永17年6/10、寛永20年4/22、	2(3)	石川忠総、従五位下主殿頭、近江国膳所藩藩主。
177	②	大久保主膳	寛永17年6/10、	1	大久保幸信、従五位下主膳正、旗本。寛永9(1632)年から御書院番頭役を勤めた。
178	②	同(大久保)右京	寛永17年6/10、寛永20年4/22、	2	大久保教隆、従五位下右京亮、旗本。寛永5年から御書院番頭役を勤め、寛永12年から大番頭役に移った。
179	④	同(堀)五郎右衛門	寛永17年7/2、	1	堀直氏、五郎左衛門、柴田を称して、京都に住した。
180	②	榊原右馬助	寛永17年7/2、	1	榊原職貞、左馬助、旗本。慶安3(1650)年から江戸城西城に勤仕し、後に本城勤仕となった。
181	⑧	石川直右衛門	寛永17年7/2、	1	
182	⑥	玄治師	寛永17年7/5、	1(4)	岡本諸品、江戸幕府の御典醫。寛永5(1628)年法印に叙任された。

ID	分類	人 名	年 月 日	会数	人 名 解 説
183	④	糸や十右衛門	寛永17年7/5、	1(6)	糸屋良亭。元は敦賀、後に京都に移った豪商。父宗貞と同じく茶湯の嗜み深く、和歌にも傾倒した。
184	⑧	松平左衛門	寛永17年7/27、	1	
185	⑧	菅谷(曾谷)宗勝	寛永17年7/27、	1	
186	①	土屋民部	寛永17年8/4、寛永20年12/26、	2	土屋利直、従五位下民部少輔、上総国久留里藩藩主。元和5(1619)年から江戸城普請奉行職を勤めた。
187	①	京極主膳	寛永17年8/4、寛永20年4/4、	2	京極高通、従五位下主膳正、丹後国峰山藩藩主。
188	②	土屋兵部	寛永17年8/4、寛永20年12/26、	2	土屋之直、従五位下兵部少輔、旗本。寛永16(1639)年から御書院番役を勤め、後に御小姓組番頭役に移った。
189	②	安藤次右衛門	寛永17年8/4、寛永20年12/2、	2	安藤正珍、旗本。寛永7(1630)年から御徒頭役を勤め、寛永10(1633)年に御槍奉行職に移った。
190	②	朝倉仁左衛門	寛永17年8/7、	1	朝倉在重、従五位下石見守、旗本。寛永7(1630)年御使番役を勤め、寛永16(139)年から江戸北町奉行職在任。
191	①	黒田甲斐	寛永17年8/8、	1(2)	黒田長興、従五位下甲斐守、筑前国秋月藩藩主。大坂城普請奉行職等を勤めた。
192	②	多賀左近	寛永17年8/8、	1(6)	多賀常長、旗本。2000知行。寛永4(1627)年から御使番役となり、数々の御目付代役を勤めた。
193	①	桑山修理	寛永17年8/8、	1	桑山一玄、従五位下修理亮修理亮、大和国新庄藩藩主。正保4(1647)年三十三間堂普請を助けた。
194	①	土井遠江守	寛永17年8/13、	1	土井利隆、従五位下遠江守、正保元(1644)年から下総国古河藩藩主。家光の重臣の一人。
195	⑧	山中宗斎	寛永17年8/13、	1	
196	①	内田信濃守	寛永20年3/13、12/14、	2	内田正信、従五位下信濃守、慶安2(1649)年から下野国鹿沼藩藩主。慶安4(1651)年家光薨御に殉死。
197	②	岡田淡路守	寛永20年3/13、11/16、寛永21年1/23、	3	岡田重治、従五位下淡路守、旗本。寛永10(1633)年御書院番役から御膳番役に転じ、後に御徒頭役を勤めた。
198	①	松平陸奥守	寛永20年3/13、	1	伊達忠宗。従四位下右少将、陸奥守、陸奥国仙台藩藩主。
199	⑧	吉田主膳守	寛永20年3/13、	1	
200	①	土岐山城守	寛永20年3/14、	1	土岐頼行、従五位下山城守、出羽国上山藩藩主。寛永6(1629)年流罪となった沢庵宗影を擁護。
201	⑧	高木九郎介	寛永20年3/14、	1	
202	⑧	道也	寛永20年3/16、	1	
203	①	今枝式部	寛永20年3/16、	1	式部は民部カ。今枝直恒、民部、加賀国金沢藩藩主前田家家臣。家老職を勤めた重臣。
204	⑧	玄团	寛永20年3/16、	1	
205	⑧	脇田半兵衛	寛永20年3/16、	1	
206	⑦	沢庵和尚	寛永20年3/27、	1	沢庵宗影、大徳寺153世住持。紫衣事件の中心人物。後に江戸品川東海寺開山となった。
207	①	酒井讃岐守	寛永20年4/1、8/26、	2(3)	酒井忠勝、讃岐守。従四位下侍従。寛永20(1643)年に従四位上左少将に昇叙、若狭国小浜藩藩主。
208	・②	同(酒井)信濃守	寛永20年4/1、	1	
209	②	同(酒井)和泉守	寛永20年4/1、	1	酒井忠吉、従五位下和泉守、旗本。慶長6年から御書院番役を勤め、寛永19年から御勘定方役に移った。
210	①	日根野織部	寛永20年4/4、	1(6)	日根野吉明、従五位下織部正、寛永11(1634)年下野国壬生から豊後国府内藩に移封された。
211	①	日根次右衛門	寛永20年4/4、	1	日根野次郎右衛門、日根野織部正吉明の弟。日根野家重臣を勤めた。
212	⑧	京極甚十郎	寛永20年4/4、	1	
213	①	松平式部	寛永20年4/7、	1	榊原忠次、従四位下式部大輔、陸奥国白河藩藩主。慶安2(1649)年播磨国姫路藩に移封。
214	①	貞伊宮内	寛永20年4/7、	1	ルビの「サダイ」が「サカイ」の誤写なら、酒井讃岐守忠勝カ。酒井忠勝はID207「酒井讃岐守」の項参照。
215	①	牧野佐渡守	寛永20年4/8、12/23、	2(3)	牧野親成、従五位下佐渡守、寛文8(1668)年迄京都所司代職を勤め、辞職後は丹後国田辺藩藩主。
216	②	板倉市正	寛永20年4/8、	1	板倉重大、旗本。寛永12(1635)年から御小姓役・御膳番役を勤め、以後、御小姓組番頭役等を歴任した。
217	②	牧野八大夫	寛永20年4/8、	1	牧野尹成、旗本。寛永10(1633)年から御書院番役を勤めた。慶安3(1650)年番役を辞し、小普請役に移った。
218	⑤	御茶堂休盛	寛永20年4/9、	1	野村休盛、石州流野村派二代目。休成の跡をうけ、御茶頭役を勤めた。
219	⑤	同(御茶堂)利斎	寛永20年4/9、	1	原田利斎、二蔵。寛永元(1624)年から家光に仕える。御茶頭役を勤めた。
220	⑤	同(御茶堂)休務	寛永20年4/9、	1	
221	⑤	同(御茶堂)養古	寛永20年4/9、	1	
222	①	松平隠岐守	寛永20年4/18、	1(2)	松平(久松)定行、従四位下隠岐守、伊予国松山藩藩主。
223	①	同(松平)美濃守	寛永20年4/18、	1	松平(能見)勝広。寛永9(1632)年松平定隆の養子となるが、多病で嫡子を辞した。
224	②	大久保惣三郎	寛永20年4/22、	1	大久保教勝、従五位下右京亮、慶安3(1650)年から西城御書院番頭役を勤め、後に御留守居役に移った。
225	①	同(石川)惣十郎	寛永20年4/22、	1	石川康勝。寛永11(1634)年従五位下彈正大弼に叙任、石川主殿頭の息。
226	②	水野小左衛門	寛永20年4/23、6/3、11/9、	3	水野守正、旗本。御小姓組役を勤め、後に西城御留守居役等を勤めた。
227	④	本阿弥三郎兵衛	寛永20年4/25、	1(3)	本阿弥光温、本阿弥家分家筋の人物。
228	④	同(本阿弥)十兵衛	寛永20年4/25、	1	本阿弥家分家筋の人物。
229	⑧	亀や新兵衛	寛永20年4/25、	1	
230	⑧	北村彦左衛門	寛永20年4/25、	1	

ID	分類	人 名	年 月 日	会数	人 名 解 説
231	①	松平佐渡守	寛永20年4/26、12/18、	2	松平康尚、従五位下佐渡守、下野国内に所領があった。慶安2(1649)年伊勢国長島藩に移封。
232	⑧	同(松平)二左衛門	寛永20年4/26、	1	
233	⑤	御茶堂正雲	寛永20年4/26、	1	二代目中野笑雲か。中野笑雲はID137「御茶堂了雲」の項参照。
234	⑦	文殊院	寛永20年4/29、	1	
235	⑦	見樹院	寛永20年4/29、12/10、	2	
236	⑦	金地院	寛永20年4/29、	1(2)	最岳元良。臨濟宗の僧侶。以心崇伝の法嗣で、金地院に住す。南禅寺274世住持。
237	⑧	正恩	寛永20年4/29、	1	
238	⑧	覚恩	寛永20年4/29、	1	
239	①	阿部豊後	寛永20年5/26、12/2、	2	阿部忠秋、従五位下豊後守、後に従四位下侍従、武蔵国忍藩藩主。家光の六人衆の一人。
240	①	板防州	寛永20年5/30、7/27、	2(19)	板倉重宗、従五位下周防守、山城国相楽郡等5万石を領した。承応3(1650)年まで京都所司代職在任。
241	①	太田左馬介	寛永20年5/30、	1	太田資次、慶安4年従五位下摂津守に叙任、後に従四位下に昇叙、太田備中守資宗息。参会時15才。
242	②	徳山五兵衛	寛永20年5/30、	1(2)	徳山重政、旗本。正保2(1645)年に御目付代役となり、寛文2(1662)年から御勘定頭役となった。
243	①	伊井頼貞	寛永20年7/27、	1	従四位下侍従、頼貞佐、井伊家家臣。井伊家の重臣を勤めた。
244	①	伊井兵部	寛永20年7/27、	1	井伊直勝、従四位下兵部少輔、近江国彦根藩藩主。
245	①	成瀬隼人	寛永20年7/27、	1(2)	成瀬正虎、従五位下隼人正、尾張徳川義直家臣。尾張国名古屋藩付家老。尾張国犬山藩藩主。
246	①	松平肥前守	寛永20年8/8、	1	前田利常、肥前守、侍従従四位下、後に左少将、中納言三位に昇叙。加賀国金沢藩藩主。
247	①	黒田左衛門佐	寛永20年8/26、	1	黒田光之、従四位下左京大夫、正保4(1647)年から右衛門佐、承応3(1654)年から筑前国福岡藩藩主。
248	①	北条出羽守	寛永20年8/26、	1	北条氏重、従五位下出羽守、遠江国掛川藩藩主。寛永9(1632)年増上寺御願普請奉行職を勤めた。
249	①	小出対馬守	寛永20年8/26、	1	小出光親、従五位下対馬守、後に伊勢守、丹波国園部藩藩主。寛永19(1642)年から上府奉行職を勤めた。
250	①	土井大炊頭	寛永20年9/3、	1(3)	土井利勝、従五位下大炊頭、下総国佐倉藩藩主。寛永10(1633)年同国古河藩に移封された。
251	⑧	山本道白	寛永20年9/3、	1(2)	
252	①	内藤志摩守	寛永20年11/11、	1	内藤忠重、初め従五位下伊賀守、寛永19(1642)年から志摩守、志摩国鳥羽藩藩主。
253	①	永井大学	寛永20年11/11、11/17、	2	永井尚康、慶安4(1651)年従五位下伊賀守に叙任、万治元(1658)年父尚政の領地の内2万石を分与された。
254	②	内藤三十郎	寛永20年11/11、	1	内藤政康、旗本。大番役を勤め、後に御小姓組組頭役を勤めた。
255	②	堀三右衛門	寛永20年11/12、寛永21年1/5、	2(4)	堀直影、旗本。堀式部少輔直之の息。
256	②	榊原左衛門佐	寛永20年11/12、11/17、寛永21年1/1、	3	榊原職信、左衛門佐、旗本。榊原左衛門佐職直の息。正保元(1644)年から小姓組役を勤めた。
257	①	毛利長門	寛永20年12/10、	1	毛利秀就、従四位下長門守、長門国萩藩藩主。
258	②	石川孫左衛門	寛永20年12/10、	1(2)	石川弥左衛門、貴成、旗本。寛永9(1632)年から御使番役や御目付役等を歴任した。
259	⑧	完道主殿	寛永20年12/10、	1	
260	⑧	梨羽頼母	寛永20年12/10、	1	
261	②	大草主膳	寛永20年12/14、	1	大草高盛、従五位下主膳正、旗本。正保4(1647)年から御徒頭役を勤め、後に御小姓組番頭役に移った。
262	②	町野左近	寛永20年12/14、	1	町野幸長、寛文元(1661)年に従五位下彦岐守叙任、旗本。万治元(1658)年から定火消役等を勤めた。
263	⑥	伯安	寛永20年12/18、	1(2)	曾谷慶伝、幕府・禁裏の御用を勤めた京都の医師。
264	②	玉虫八左衛門	寛永20年12/21、	1	玉虫宗茂、旗本。御小納戸役を勤め、後に奥方新番所頭役等を勤めた。
265	⑧	大久保平六	寛永20年12/21、	1	
266	②	大岡忠四郎	寛永20年12/21、	1	大岡忠種、後に従五位下佐渡守、旗本。万治3年御目付役から新番頭役に移り、後に大目付役を勤めた。
267	②	遠山十右衛門	寛永20年12/21、	1	遠山景重、旗本。御膳奉行職や御小納戸役を勤め、寛永20年から新番頭役を勤めた。
268	②	長谷川長五郎	寛永20年12/21、	1	長谷川重辰、旗本。中興番役を勤め、慶安4(1651)年から二の丸御留守居役を勤めた。
269	⑧	神尾五助	寛永20年12/23、	1	
270	②	鈴木修理	寛永20年12/23、	1	鈴木長常、旗本。代々鈴木家は作事方奉行職を勤めた。
271	⑧	樽屋藤左衛門	寛永20年12/23、	1	
272	⑧	伊阿弥修理	寛永20年12/23、	1	
273	①	同(土屋)大和守	寛永20年12/26、	1	土屋数直、従五位下大和守、後に但馬守、常陸国土浦藩藩主。寛文5(1665)年から老中職を勤めた。
274	②	星合太郎平衡	寛永20年12/26、寛永21年1/1、	2	星合具通、旗本。寛永2年から御右筆役を勤め、寛文3年から御書物奉行職を勤めた。
275	②	水野庄左衛門	寛永21年1/3、	1	水野元重、後に従五位下伊予守に叙任、旗本。明暦2年から御使役勤め、寛文4年から堺奉行職を勤めた。
276	①	松平新太郎	寛永21年1/6、	1	池田光政、侍従従四位下、左少将、備前国岡山藩藩主。
277	②	神尾内膳	寛永21年1/6、	1	神尾元清、後に従五位下備前守に叙任、旗本。神尾若狭守元珍息。寛文11年から新番頭役を勤めた。
278	①	保科肥後守	寛永21年2/4、	1	保科正之、出羽国山形藩藩主。寛永20(1643)年陸奥国会津藩に移封。

ID	分類	人 名	年 月 日	会数	人 名 解 説
279	①	松平阿波	寛永21年2/5、	1(2)	蜂須賀忠英。従四位下阿波守、阿波国徳島藩藩主。
280	②	堀内宗兵衛	寛永21年2/5、	1	坪内惣兵衛、定仍、旗本。慶安元年から御鉢砲頭役を勤め、慶安3年美濃国の洪水地権断役を勤めた。

※1人名欄の記載は虫損以外は原則的に(資料1)の記載に従い、適時、補足を行なった。

※2分類の番号は下記の通り対応している。

- ①大名及び大名の家臣(御抱えの役者や茶頭役や医師は除く)
- ②旗本・御家人(但し、医師や数寄関係の役職にある者、絵師は除く)
- ③遠州家一族や家臣、御抱えの医師、御抱えの職人
- ④町人(塗師等の職人、商人、茶師、幕府や大名家の御抱えでない役者等)
- ⑤幕府や大名の御抱えの茶頭(御庭方や数寄屋頭職在職者等も含む)
- ⑥幕府や大名の御抱えの医師や役者、碁打
- ⑦寺社関係(寺社付の人物も含む)
- ⑧身分不明分(身分を調べたが不明かつ推定不可能な人物)

※3会数欄の丸カッコ内は、小堀宗慶編『小堀遠州茶会記集成』(一九九七年、主婦の友社)で参会が指摘できる総会数を示した。

※4人名解説は、小堀宗慶編『小堀遠州茶会記集成』内人名解説を参考しつつ、主に下記の参考文献を用いて改めて作成を行なった。

- 林屋辰三郎他七名編『角川茶道大事典』(一九九〇年、角川書店)
- 『角川日本姓氏歴史人物大辞典』26京都市姓氏歴史人物大辞典(一九九七年、角川書店)
- 『新訂寛政重修諸家譜』(統群書類従完成会刊行)
- 井口海仙・末宗廣・永島福太郎監修『原色茶道大辞典』(一九七五年、淡交社)
- 佐藤サアラ「遠州茶会に招かれた人々」(平成八年度根津美術館特別展図録『小堀遠州の茶会』所収、一九九六年、根津美術館)
- 『徳川諸家系譜』(統群書類従完成会刊行)
- 『藩史大事典』第1巻から第7巻(一九八八年から一九九〇年、雄山閣出版)
- 『和歌山県史』近世史料一(一九七七年、和歌山県)